MYSTERYDOKUSHOANNAIMYSTERYDOKUSHOANNAIMYS

ミステリ読書案内

２０２４．２．１６　発行元
第 552 号　伊藤　剛
https://mystery-dokuan.com

MYSTERYDOKUSHOANNAIMYSTERYDOKUSHOANNAIMYS

永井紗耶子『木挽町のあだ討ち』

『このミステリーがすごい！』年間ランキングの第６位になった永井紗耶子の『木挽町のあだ討ち』を取り上げる。江戸時代の「あだ討ち」をテーマにした時代小説で、感動的な場面が連続して語られていく。

基本は「時代小説」

作者の永井紗耶子はミステリ出身の作家ではない。読み始めると「ああ、これはミステリとして書かれたものではないな」と感じる。常に「ミステリ」に範囲を絞って読んでいる私には「苦手な人情噺だったら嫌だな」という思いが先に立つ。でも、読み進めてみると、話に引き込まれてしまい、ひとつひとつの場面に夢中になってしまう。全体のストーリーが策略的であり、よく練られていると言えるだろう。

『小説新潮』に連載された後、昨年１月に新潮社から単行本として出た。昨年の直木賞・山本周五郎賞受賞作品。

木挽町での仇討の顛末

最初のページに当時の新聞とも言うべき「読売・鬼笑巷談帖」に載った仇討の話が示してある。「睦月晦日の戌の刻。…木挽町の芝居小屋の裏手にて一軒の仇討あり。」「我こそは伊納清左衛門が一子、菊之助。その方、作兵衛こそ我が父の仇。いざ尋常に勝負」…。

世間的に認知されている仇討の様子が書かれている。これだけ読むとごく通常の流れの仇討にみえるが、ここから先が本書のすごさなのである。仇討に絡む数々のドラマが少しずつ少しずつ見えてくるようになる。その仕掛けが上手に組み上げられているのだ。

取り巻く人達の人生

仇討の主人公は菊之助なのだが、この人物本人の語りは最後の方にしか出てこない。菊之助が仇討に出たのはまだ元服前の十五歳くらい。江戸の木挽町まで流れてきて、そのに住むいろいろな人達との交流が物語を支える。

第一幕に登場するのが芝居小屋の木戸芸者をしている一八。仇討の話もするけれども、一八自身の生い立ちが語られる場面が感動もの。第二幕に登場するのが殺陣の指南役をしている与三郎。菊之助との交流も話してくれるが、与三郎自身がこの場に流れ着いた経緯がまた心を震わせる。「ミステリ」とはまったく関係なく場面場面で涙を誘う内容が書かれている。

以下、各幕ごとに菊之助に関わった芝居小屋関連の人達の証言が続き、次第に裏に隠されていく真実が見えてくる形になっている。

武士の世界、庶民の世界

「仇討」というのは完全に武士の世界。そこに拘りながらも、江戸の町に住む庶民、というか芝居小屋という「悪所」に関わって生活している人達の生き方、考え方を表現しようと試みたのが本書ということになるだろう。直木賞も当然の結果かなと思う名作。

「時代小説」で「ミステリ」

今回は「時代ミステリ」特集である。現在、「捕物帳」形式は少なくなったが、江戸時代などを舞台にした作品はたくさん書かれている。ミステリ作家でも時代小説に移行していく人もいる。ここには取りあげなかったが、山本巧次作品にはミステリ味の強いものから、ほとんどミステリの範囲には入らないものまで各種存在している。私は「ミステリ」の観点で読む読者なのでこだわりがあるけれども、一般読者は「面白く読めればよい」という人が多いと思うので、ジャンルはあまり気にする必要はないのかもしれない。

田中啓文　『白鷺烏近なんぎ解決帖』

昨年７月に光文社から出た本。『小説宝石』に連載したものに書下ろしを加えた５編が納められた連作短編集。田中啓文得意の江戸時代の大阪を舞台にした時代ミステリ。白鷺烏近は元は岸和田・岡部藩の小姓頭を勤めていた武士。無理難題を投げつける藩主・岡部美濃守の不興を買ったため勘当され、浪人となり、大阪土佐堀川に浮かぶボロボロの屋形船で生活することに。「ご無理ごもっとも始末処」の看板を掲げて相談事を引き受ける流れとなる…。

第一話は『川の流れを逆にしろ』。厳しい年貢の取り立てをやめない殿様を諌めようとした僧侶の命を救うために烏近が知恵を絞る。「木の葉が沈んで石が泳ぎ、川の水が下流から上流に向かって流れるありさま」を実現しなければならない。これは難問。以下、第二話『人魚の肉を手に入れろ』、第三話『金のシャチホコを修理しろ』、第四話『座敷童子を呼び戻せ』、第五話『自分の声を後世に残せ』と続く。基本的には、殿様が言い出したことが発端になっているが、大阪に住む庶民の協力を得ながら工夫を凝らす展開が読みどころ。大凧に乗ってお城の天守閣の上に登ること果たして可能なのだろうか？　とてもとても無理なことのように感じるのだが…。最終話で烏近の行き先が見えてくるようで…。続編は書かれるのだろうか。